これに対して、英系などの住民はその90%が「否」を投じた。パリゾー首相は「金と反仏票が主権提案をつぶした」と苦々しく語った。(*Mainichi Daily News*, Nov. 1, 1995) この敗北を受けて、パリゾーは辞任、独立派のカリスマ的存在であるブシャールが州首相に就任するが、かれはその立候補表明の記者会見で日時こそ明確にしなかったけれど次の住民投票を示唆している。(朝日新聞1995年11月25日)

分権的連邦制度(各構成メンバーの独自性を尊重した非均質的な連邦制度)の立場をとる政治学者レオン・ディオンは、1984年日本を訪問したとき、ケベックが1982年憲法に署名を拒否している理由を大略次のように述べた。

「なぜ、1976年のケベック州選挙においてケベック党が政権をとったのか。それは、大きな危機感である。今や、連邦主義者はケベックが建国の2民族の一つであり、従って決してカナダの10州の一つではないという事実を忘れてしまっている。1982年憲法を認めれば、単純な多数決によってなし崩し的にケベックの<独特の>地位が抹殺されるであろう。具体的にいうと、1982年憲法では、憲法改正に関してケベックが前々から要求してきた拒否権が認められていない。また、教育に用いられる言語についていえば、最近の最高裁の判決が、新憲法の23条に含まれる「カナダ条項」はケベックの「フランス語憲章」(法案101号)の73条に述べられている「ケベック条項」に優先するとしている。私は、トルドー首相のように法律一辺倒で物事を考えるよりは、より社会学的な視点をもつべきだと思う。」(「カナダ、1980年代における憲法問題の意味」1984年8月27日 講演記録)

1997年8月26日、ケベックでは「ケベック言語憲章」(法案101号)制定20周年記念の式典が行われ、法案の作成に当たった人々(そのなかにはケベックの著名な社会学者の名前もみえる)が招待された。その席でブシャール首相は、これがケベックの文化と言語の歴史における未曾有の出来事であり、おかげで今日93%のケベック人がフランス語を理解するようになったと述べた。そして次のように締めくくっている。

「ケベック人としての独自性、広大な英語圏大陸におけるフランス語使用者としての差異性、それがわれわれの文化と歴史の繋錨点であり、アイデンティティと命運の相である。」(Site officiel du premier ministre du Québec-Discours, 1997)

ケベックの法律によれば、同一政党の政権下で同じ問題について住民投票を2回行うことは出来ない。そこで、来年(1998年)予定されている州選挙で有権者がケベック党を選ぶか、それともケベック自由党を選ぶかが焦点になる。もちろん、自由党ならレファレンダムはない。ただ、現在のケベックは財政赤字の削減や雇用の創出が焦眉の急という状況なのではある。

3)地域主義

1980年代、保守党政権下で比較的安定していたカナダの連邦制は、1990年代に入ると地域主義に脅かされることになる。1993年の総選挙でそれが一気に吹き出し、その傾向は1997年の総選挙でも継続している。与党の進歩保守党が下院での議席数を155から2へ劇的に減少させた1993年総選挙をみてみよう。

進歩保守党は全国で16%の得票率であったが、得票が分散していたため議席に結びつかなかった。それに対して、分離主義を標榜するケベック連合は得票率では14%であったが、ケベック州(定数75)だけにしか候補者をたてず、54の議席を獲得したのである。他方、多元主義に否定的な極めて保守色の強い改革党も西部を中心に候補者をたて、アルバータ州(定数25)で24の議席を獲得するなど、19%の得票率で合わせて52議席を獲得した。こうして、リベラル(自由党)の政権下で(得票率41%で、過半数を超える177議席を獲得)、二つの相対立する地域政党が野党として存在するという今日の構図が成立したのである。ちなみに、社会主義政党である新民主党は得票率が7%で、43もっていた下院の議席を9にまで減らした。

1997年総選挙では、下院の地域的分裂はいっそう顕著になっている。与党の自由党は38%の得票率という史上最低の支持で過半数の155議席を確保したが、その内の101はオンタリオ州から。西の改革党は前回と同じ得票率で8議席伸ばして60議席を獲得、一方ケベック連合は支持率を11%に減